

会報

No. 36

平成7('95)年3月15日

京都府図書館等連絡協議会

事務局

京都市左京区岡崎成勝寺町9
京都府立図書館内
TEL(075)771-0069

図書館あれこれ

京都府立図書館長 高木多喜男

〈館長の役割〉

文部省が平成四年に全国に通知した「公立図書館の設置及び運営に関する基準」には、館長は図書館の役割及び任務を自覚して、不断に図書館機能を十分発揮できるように努めるものとする、と書いてある。

また、図書館テキストには、奉仕対象者全体に対する総合的な図書館計画の企画者であり、組織者であり、運営の責任者である、とある。

館長となって、責任の重さをずっしりと感じている。

〈五〇という数字〉

これは京都府図書館等連絡協議会の会員である図書館や読書施設の数である。昭和五十一年発足当時の二十三からみると、ずいぶん増えたものである。その活動も、資料の相互貸借、職員の研修など年々定着しているのは、嬉しいことである。

最近の事業として、平成六年四月から実施されたウォンテッドは、会員図書館の相互協力という意味で、画期的なことであると思う。始まってまもないこともあり、いろいろの



問題があると思われるが、それぞれの図書館が合意できる範囲で、継続してきたその意義は大きい。

〈八五〇万〉

この数字は、平成五年度に京都府の市町村の図書館及び府立図書館から貸出された資料の冊数である。公民館図書室から貸出されたものを加えるとさらに多い数字となる。

これは、自ら学びあるいは楽しむという生涯学習の場として、図書館が住民の中にとけこんできたことを示していると思う。

かつて図書館は、人類の知的活動の成果である図書を保存、継承するという意義に重点が置かれていたが、いまは日常的な生活に必要な資料や情報が得られる場所として図書館の存在価値が認められるようになってきたものといえよう。

〈井手町図書館開館式〉

平成六年七月、ご招待をいただいで井手町図書館の開館式に出席したが、町長さんは、住民のみなさんの希望をきいたら図書館がほしいとい

うことになり、建設することにしたと述べられた。

〈優良読書グループ〉

恒例の読書週間の行事として、読書推進運動協議会から優良読書グループの表彰があった。平成六年度は田辺町の「源氏物語を読む会」が十五年間のキャリアを評価されて、晴れて選ばれたものである。

その協議会の世話を府立図書館がしている中で、私とその伝達式に出席して表彰状を手渡したが、内心とても嬉しいことであった。

十五年間。これだけ長続きするための条件は、会員さんの熱意とよいリーダー、そして田辺町立中央図書館という生涯学習の場、これが三要素であると思う。

伝達式出席の会員のみなさんは、いきいきとした、明るい表情をされており、これこそ生涯学習の本当の姿だ、と感激したものである。

〈府立図書館〉

地域の図書館がこのように充実してきた現在、府立図書館は、市町村の図書館や読書施設に協力し、広域図書館としての機能をさらに一歩前進させる方向で努力したいものと思っている。

元気がついた泊研修

いつも好評の本協議会の実務研修会ですが、第四回目を二月二日・三日に八幡市石清水八幡宮青少年文化・体育研修センターで四十一名の参加により開催。会後は有志による八幡市民図書館、男山図書館への見学研修もなれました。

〈内容報告〉

一日目（講演会・分散会）

☆講演 演

「児童図書を選択・収集と日常の業務」

名古屋市立千種図書館

若原真理子氏

名古屋市図書館は児童サービスの体制の充実に努力しており、その中、図書選択は現物見計りである。週一回、全館集まって、約八〇〇冊から選ぶ。児童書については選書に先立ち、予備調査を行っている。児童室担当が一冊ずつ目を通し、レビュースリップに評価を書きこむというもので、このスリップが、選書の際の資料として活用される。

図書館員の本の選ぶ力をつけるために、全体研修や分科会（ヘリスト作り、ツール作り、ストーリーテリング）研修が行われ、その他、新人・

初級・養成講座など研修制度の確立が進められている。

蔵書構成についても、核となる本を重視するよう心がけていること、さらに、子どもたちと本の出会いを大切にするために、児童図書館員は今何をなすべきかと、リーフレットなど紙では通じない感動、又、本ならば何でもよいのではなく、「本の生の感動を直接子どもに伝える努力をと、ブックトーク、読み聞かせ、読書会などをシステムとして継続する必要を強調された。

「児童資料の選択を素材として」

枚方市立枚方図書館

川上 博幸氏

子どもの人口の増加・減少に伴い、子どもの本の出版も増減した。図書館界は、おおむね登り調子であったが、臨時職員の増加などで表されるようにサービスの質やサービスを支えるしくみ（予算、人など）にはころびが見えてきており、図書館は、今、冬の時代であるといえる。

一九七五年以降の予約論争では、子どもや本について図書館員としてきちんとした考えを持って仕事をすることを感し、努力した。

活字離れは、先進文明国で進行し

ているが、図書館員は、読書の意義を考へるべきだ。読書をするとい

うことは、「物語」に言葉や、文字を通して

出会うといふことである。漫画はサービスのスタートラインであって目的ではない。本の水準を下げるのではなく、本が子どもにとくよう図書館員の努力が求められている今日である。

☆分散会

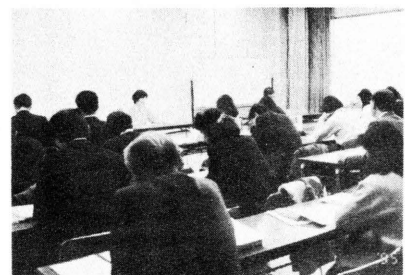
どのように子どもと本を結びつけていったらよいか。リクエストに対する対応。選書にあたって子どものニーズの把握。等々が話題になった。

二日目（全体会・討議）

☆京都ライトハウス、矢部氏の報告

「読み書きサービス」

ライトハウスでは、予約なく気軽に利用してもらえるよう「読み書きサービス」を開始され、障害者の必要とする資料を、早く、その場で提



供できるようにしている。月一〇〇〜一五〇件の利用がある。その他、公共図書館とライトハウスとのより積極的な協力をよびかけられた。

☆主な討議

いわゆる良書を核に集めるべきであるという論に対し、子どもが興味を持った数多い資料を広く提供すべきでないか、大きな可能性をもっている子どもに対して大人は規制すべきではない、という意見が出された。

又、宇治、八幡、舞鶴、綾部の各図書館の選書システムの現状と問題点の報告があった。

川上氏より、「一つの資料が、図書館の蔵書になった過程を大切に、その後、どのようなサービスを展開していくかということも大切にしよう」。若原氏は、「本の選択は、一度で終わるのでない、何度も機会が訪れる。研修、勉強の積み重ねで、自分自身を高めていってほしい」という助言を頂いた。

最後に、研修委員長が、「明日からの職場での実践、図書館員の交流、そして議論の輪を広げ、この研修で提起された問題を明らかにしていってほしい」というまとめを行って閉会した。（文責 研修研究委員会）

〈それぞれの感想〉

◆資料選択、特に児童書の選択について講演と研究協議が行われ、その中で、二つの異なった意見が出てとても興味をひく内容でした。

子どもには、さまざまな資料の提供がのぞましく、ニーズに合わせて子どもの興味があろうな本はどのような本でも揃える。一方、図書館に対する市民の信頼のもとに、図書館は資料を選択しているのだから、子どもの真のニーズを把握して興味本位の本ばかりでなく、古典など基本的な図書も整えておくというものです。私は、現在のように情報が氾濫しては、どんな本でも子どもは読みたい本を見つけないと思います。良書、悪書は時代と共に変わり、個人の主観の相違もあります。また、子どもたちをはじめ図書館を利用される方も、いつまでも手元におきたい本と一過性の本への思いは異なり、図書館の利用方法も違ってくると思います。私はそれらのことを踏まえての選書を考えても良いのではないかと思います。

(京都市伏見中央図書館

白井 真弓)

◆今回の宿泊研修に参加させていただいたことは、私にとって非常に有意義でありました。

児童資料を素材として資料選択を中心にした日常業務の改善というところで講師の方や、他市町村の図書館員の方々の意見を聞くことができ、

日頃の選書業務の悩みを解消する糸口が見える思いがしました。

また、分散会や交流会などでは、研修テーマ以外にも、日常の図書館業務での疑問や悩みなどといった身近な問題で意見交換ができ大変有意義にすごすことができました。

日常業務に追われる中で、選書、発注をこなしている私にとって、皆さんの意見は、非常に参考になることばかりで、今後の図書館サービスに十分生かしていきたいと思います。(木津町中央図書館 神田 厚)

◆名古屋市中では週に一度、各館の児童担当者が集まり、一冊ずつの評価をしてから再検討され購入するということでした。

担当者が代われば、選ばれる本の傾向までが変わるおそれのある当館と違い、いろいろな人の目を通り、館としての体制がしっかりできています。若原氏もその重要性を指摘されていました。一館ではできない養成講座を京都府でも開いていただきたいと思っています。

「忙しい日々の中で、ちょっと変わっていく、ちょっと工夫する事が大事。」と若原氏。

「館としてどう対応するかは大切だが、司書として自分はどう考え自分はどうしたらいいか考える。」と川上氏。

このお二人の言葉が心に残った研修でした。

(園部町立図書館 山藤 真美)

◆児童書の選書にはいつも頭を悩まされていた私にとって、今回のテーマは願ってもない研修の機会でした。「本でなければ出会えないもの」と出会ってほしい。」「熱意をもって子供と本を結びつける。」という両講師の力強いお言葉に、ごもっともと領きながらも「子供が選ぶ事ができるよう、いろんな本を揃えるべきだ。」という参加者の意見にも納得してしまっ、自分としての結論を出すどころか、益々混乱してしまいう結果となりました。

とにかく、今私がすべきなのは本を読んで読みまくる事だ、とだけは実感しました。

一人の人間が少し変わっていく事が、図書館に大きな影響力を持つと講師の方がおっしゃっていました、それを信じて今後も勉強していきたいと思っています。

(舞鶴市立東図書館 竹之内英子)



ニ ュ ー ス ・ N e w s

開かれた学校づくりと

図書館開放

京都府立海洋高等学校

本校は、平成二年に教育内容の一新と校名変更を行うとともに、巨額を投じて校舎及び施設設備の改善を行いました。そして、学校は地域に理解され、地域の学校としてありたいという思いから、開かれた学校づくりを目指している。いろいろ取組を行っています。

その一環として平成五年十月から図書館開放を実施しています。この開放は水産、海洋に関わる専門書など職業高校ならではの図書を蔵書する本校の特色を生かそうとスタートしたものです。

まだまだ十分な利用がされておらず多くの府民の皆様にご利用していただきたく、この紙面を借りてお願いします。

【追】 京都府が学校の地域開放の一環として、図書館を一般開放している高校は次のとおりです。土・日を中心に月四回開館されています。

五年度からの開放校

桃山・東宇治・工業・海洋

六年度からの開放校

洛北・西乙訓・木津・須知

(広報委員取材)

新加盟館紹介

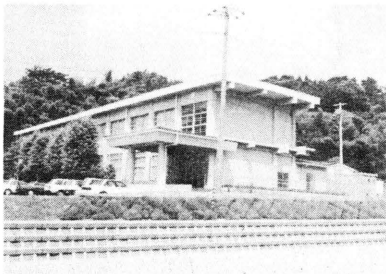
和束町体験交流センター・図書室

京都府図書館等連絡協議会に、平成六年度に加盟させていただきました「和束町体験交流センター・図書室」です。

当図書室は、平成元年度まで使用されていた府立木津高等学校和束分校校舎を増改築し、装いを新たに社会教育施設「和束町体験交流センター」内に設置されました。そして、平成二年度七月から、蔵書数六千冊でスタートしました。

それまでは、和束町内には読書施設がなく、府立図書館の資料の貸出を受け、町役場の住民ホールに図書をおき、希望者に貸出を行っていました。また、移動図書館車「あゆみ号」の月一回の巡回を利用し、細々と読書活動を行っていました。そして、「あゆみ号」の廃止を契機として、へ町にも読書施設を設けるべく、声に心え、開設したものです。

現在、毎週水曜



日と日曜日、及び毎月第二土曜日を貸出日として、午前九時三十分から午後四時三十分まで開室しています。開室してから足掛け五年が経過し、蔵書数も一万三千冊程度に増え、約九〇㎡の図書室では手狭になってきています。

登録者も現在一千百名となり、定着した感があり、年間貸出冊数は二万冊になりました。特に、児童書や紙芝居の貸出冊数が多く、全体の七割を占めています。

利用者のリクエストや、購入希望に応えた図書資料を整備し、より新しい資料を、より早く利用者に提供できるように努めています。また、カセットブックやビデオソフトなどの視聴覚資料の整備も進め、身近な学習の場として、より多くの方々に利用していただくことを目標としています。

今後は、当館の活動などについて町民全体にアピールを強化し、利用者の拡大に力を入れていきたいと思っています。

さらに、住民や町当局に図書館の重要性を訴え、一日も早い図書館の設置に向けて頑張っていきたいと考えています。



専 門 委 員 会 ニ ュ ー ス

◎相互協力委員会

二月八日、府立図書館で委員会を開催いたしました。概要は次のとおりです。

一、「WANTED」の実施状況について

(1)「W」の利用は協議会に加盟していない読書施設も多く、加盟を働きかける。

(2)所蔵調査館の範囲を広げる努力をする。(3)対象資料のうち新刊でベストセラーのようなものは各館で揃えるようにする。(4)達成率を高めるための方策を検討する。(5)FAXの送信曜日と搬送手段の問題、並びに、巡回回数増加等府立図書館への要望については持ち帰り相談する。

二、「相互貸借実態調査」の実施について

平成三年度の実態調査を基に新たに「W」の項目を加えた調査を実施する。実施時期については今後検討する。

三、「新聞・雑誌総合目録」の補正版の作成について
要望が強いので実施について事務局と相談する。

◎研修研究委員会

未来への課題——
一泊研修のとりくみ、期待

に十分に伝えられたでしょうか。

日頃、とくに一泊研修時に気になることですが、議論され行き交う言葉が、同じ言葉であっても、理解されている内容が異なっているケース、お互いに異なるイメージをもって議論されているケースが目につくことです。「生涯教育」「ニーズ」「文学」「面白さ」「良書」そして「図書館」などです。この状況の克服には、経験の交流、自己研修、議論が欠かせません。委員会では、より充実した研究研修を目指します。

◎広報委員会

遅い発足の六年度でしたが、なんとか三回の発行義務を果たすことができました。

七年度は、期間にゆとりがありそうですので、内容的にも少しはあそびを加えたものにしたいと思っていますので、投稿なども歓迎します。

発行計画は次のとおりです。

第三十七号 六月～七月

第三十八号 十月～十一月

第四十号 二月～三月

編集子

聞くとところによりますと京都府南部図書館等連絡協議会では初めての拡大役員会が一月にもたれ、域内での新聞・雑誌の保存分担や域内での連絡協力車の運行の試行等を継続研究課題としてゆくことが確認されたそうです。